

足関節用サポーターが適応しなかったスポーツ外傷 2 例

吉村 圭吾 (PO) 所属：有) ピー・オー・テック

【目的】

スポーツ人口が増加するに伴い足関節周囲における外傷も様々で、今回紹介する 2 症例は足関節用サポーターの処方が考慮されたが、一般的な規格品であるサポーターが機能するのに困難だった 2 例を紹介する。

【症例 1】距骨下関節脱臼

男性、フリークライミング中に高所から転落して受傷、単純 X 線で内側距骨下関節脱臼を認めた。受傷より 2 週半ギプス固定、6 週より PTB 免荷装具装着下での部分荷重を開始した。骨癒合も良好に進み装具を除去したが、荷重時痛が出現したため足関節サポーター処方も考慮されたが MRI 検査にて離断性骨軟骨炎を指摘され免荷装具装着が継続となった。

【症例 2】腓骨筋腱脱臼

女性、バレーボール中レシーブをした際に捻挫して受傷
一度は医療機関を受診し装具を処方されるが外果部に違和感があったため、スポーツ専門の整形外科にてセカンドオピニオンを受け腓骨筋腱脱臼を指摘される。
前院で処方された装具をリメイクし違和感の改善には至ったが完全ではなく、考察のうえ背屈制限+アーチサポート機能の付いた短下肢装具を製作し安定に至った。

【考察】

症例 1 の距骨下関節脱臼は、全外傷の 1% と非常に稀な症例であり、高所からの落下や交通事故で受傷する報告が多い高エネルギー外傷である。今回足関節サポーターが機能しなかったのは、距腿関節に生じた離断性骨軟骨炎のためであるが、高エネルギー外傷は主たる外傷以外に隠れ外傷も後に見つかるケースもあり、そのようなケースでは予後が悪い。高エネルギー外傷による脱臼・骨折に伴う治療終末期に処方される装具においては処方医との十分な検討を行い装着すべきと考える。

症例 2 の腓骨筋腱脱臼では脱臼し辛くする工夫を下腿アライメントや筋腱の走行、どのような場合に脱臼するのかを考慮しサポーターへの工夫を施す必要がある。ポイントは腓骨筋に求心性、遠心性共に収縮をコントロールすることと考える。いわゆる、外返しをさせない事と、母趾球での荷重をさせ難くすることである。

特に、外反偏平足やニーイン・トーアウトを呈した場合やスポーツの中でそのような姿勢が強られる場合は機能し辛くなる。一般的に外果パッドを足関節サポーターに追加する事があるが、それでもうまくコントロールできない場合に参考としていただければ幸いである。